

## 9月歴文研修会・報告 壬申の乱II

塩本 勝也



9月11日 熱田神宮本殿前にて

前日までの空模様とは一変、歴文日和となり参加者28名全員そろい8時前に出発した。

5年前、「<sup>じんしん</sup>壬申の乱の跡をめぐる」で美濃国不破郡関ヶ原にその遺跡を訪ねた。今回は吉野から脱出した<sup>おおあまのみこ</sup>大海人皇子（後の天武天皇）の関ヶ原までの足跡を伊勢、尾張国を中心に探訪した。

車窓より大和の山々を眺めながら西名阪道を東に向かう。車内では藤田講師が日頃の研さんの成果をまとめ、参加者への真摯な説明が始まった。生駒交通最新鋭のマイクロバスのディスプレイシステムと持込みのPCを駆使し、膨大なデータの中から精選された資料での解説である。7世紀の東アジア情勢・白村江の敗戦処理・壬申の乱の経緯と意義・伊勢、尾張、美濃と古代豪族尾張氏等々で聞く者に積年の疑問を解かせる内容であった。

大和を出て伊賀国の積殖の山口で大津宮を脱した高市皇子と合流、伊勢国に入り鈴鹿道の封鎖、朝明郡の<sup>とほがわ</sup>迹太川の辺で天照大神遥拝、大津皇子合流などに思いをはせる。<sup>うののきらら</sup>鵜野讚良皇女（後の持統天皇）と皇子等を2ヵ月留めた桑名郡家跡という北桑名神社を見る。ここから大海人軍は兵力を増大しつつ関ヶ原・野上行宮に進撃して行った。

壬申の乱の最大の勝因は、海運、水運、陸路の要衝を支配する尾張氏一族の力をフルに発揮させ、バックアップさせたことにある。古代より天皇家とは深い外戚関係を築いてきた尾張氏一族の中樞

である尾張国に入る。まずは熱田神宮へ、神官に出迎えられ全員で本宮参拝。御祭神は熱田大神で三種の神器の一つ<sup>くさなぎのつるぎ</sup>草薙神剣を御霊代とされる天照大神である。本宮や日本武尊伝承について説明をうけ、こころの小径へ。一之御前神社（荒魂）、清水社は眼と肌に良いと聞いた途端、女性陣でにぎわうこと。神官の軽妙な解説を楽しみながら土用殿、信長塀等々を見て文化殿に入る。ここは宝物館で御祭神の関係からか、各時代の銘刀がズラリと並んでいるのが印象的であった。

熱田神宮を出て<sup>だんぶさんこふん</sup>断夫山古墳を見る。墳長150m、東海地方最大の前方後円墳で、6世紀前半の築造と推定。尾張地方に大きな勢力を持った尾張氏の首長墓に比定されている。尾張<sup>くさか</sup>連草香か？



断夫山古墳を前にして

博物館では、特別展「海たび」を見る。海を支配し、やがて濃尾平野全体を掌握する大豪族「尾張氏」の海民伝承や尾張・知多地方が古代以来一貫して海に育まれた重要な歴史文化の地域であることを知る。常設展では信長、秀吉、家康にまつわる展示を垣間見てバスに戻る。

旅の最後は小雨に煙る日本武尊の神剣を祀ったという<sup>みやずひめ</sup>宮寶媛ゆかりの氷上姉子神社に参拝した。

雨の降りだした名古屋を湾岸道で亀山に抜ける。帰路の大和は夕陽の差す彼方である。車中は杉本講師の「壬申の乱と万葉集」で、天智天皇・天武天皇とその皇子と皇女たちを取り上げ、額田王や許されぬ恋の歌の心情を説明された。古川さんが犬養節よろしく朗詠、みなさん唱和し歌を味わう。

バスは予定の30分遅れで近鉄奈良駅前へ。壬申の乱IIのそれぞれの想いを胸に帰途につく。それでも熱く語り合う仲間の反省会が続いた。